フォーラム「私たちが生きる意味―相模原殺傷事件から考える」詳報 ㊦

「交流の機会増えれば理解進む」

共生社会目指したい／心のバリアーに変化

相模原市の知的障害者施設・津久井やまゆり園で、入所者ら46人が殺傷された事件を受け、宮崎市のNPO法人YAH!DO（やっど）みやざきが同市で開いたパネルディスカッション「私たちが生きる意味―相模原殺傷事件から考える」。後半は障害者を取り巻く本県の現状や、共生社会実現のためにそれぞれができることを、県内の障害者や支援者ら5人のパネリストと、助言者として加わった県外の識者2人が語り合った。（徳留亜弥）

パネルディスカッション

中川　日本でも、随分前から共生社会やノーマライゼーションが大切だといわれている。宮崎の現状は。

岩切　私を知らない人の多くは、横にいるヘルパーさんに話し掛ける。「車いすに乗っている、話し掛けにくい人」と思われている。

日高　「あなたは、医療や福祉が充実しているから生きられる」と言われ、衝撃を受けた。大事にされない社会が宮崎にもある。一方で、精神障害者と市民が交流する地域活動支援センター「かふぇらて」が、宮崎市にできた。交流の機会が増え、広く知られるようになると理解も進む。

吉村　認知症サポーター養成講座が盛んに開かれ、地域での差別は改善方向にある。問題は、認知症の診断が出たら家族に「精神科病院に入れなさい」と言う医師などの医療従事者。私は自らの支援体験から、認知症の人も居心地のいい環境で寄り添った生活ができれば、穏やかに暮らすことができると考えている。

大熊　政府による認知症対策の国家戦略（新オレンジプラン）は、認知症患者を精神科病院に入院させ、症状が良くなったら地域に出す―などとしている。しかし、今の精神科病院は、入院が長期化する傾向にある。このような構造的な問題は、ほかの障害にも当てはまる。

井島　重症心身障害児の療育キャンプを行っている。今年は19人の障害児と、146人の医療やボランティアスタッフが参加した。子どもの笑顔はもちろん、学生ボランティアや障害児のきょうだいが成長し、医療スタッフやボランティアなどとして参加する姿に意義を感じる。

大口　岩切さんに、車いすの機能について尋ねられず、私の心にあるバリアーに気付いた。普段一緒に過ごしていないから、踏み込んだらいけないと思ってしまう。学校教育の場も、障害の有無で分けられている。必要な面もあるかもしれないが、見えなくなるものがたくさんある。

中川　互いの価値観を知って同じ時を過ごせば、自然とバリアーはなくなる。制度も意識がなければつくることができない。共生社会に込める願いは。

岩切　私を「車いすに乗っている特別な人」と決めつけず、「車いすに乗ってこういうことを持っている人」と、個人に意識を向けてもらえると、認め合う社会になる。言葉にできない障害者にも好き嫌いはあり、受け手が感じられていないだけ。障害者側も臆病になりがちな気持ちを変える必要がある。

日高　精神科の閉鎖病棟にいた時、自分に意味を見いだせず苦しかった。退院後いろんな人と会い、生産性のない人はどこにもいないと実感した。みんなが生きる意味を持っていると伝えたい。

井島　障害のある子がいたら保護者も弱者、と思うことから脱却しないといけない。私は近所の人に積極的に話し掛けるようにしている。そこから共生社会を目指したい。

吉村　甘え上手になることが大切。「助けて」と言える環境をつくるために、近所とコミュニケーションを取っている。みんな一緒というところにたどり着いて初めて、安心して暮らせる社会になる。

大口　障害のある人と関わった方が楽しいと思うようになり、私の中のバリアーも変わってきた。人間は、相手が分からないから付き合う。「相手を傷つけてはいけない」ではなく、一緒にいて楽しいと思えることが大切だ。

大熊　心掛けで解決できることとできないことを、分けて考える必要がある。昔の日本型福祉は、家族やボランティアで支えようとして、うまくいかなかった。この分野はみんなでお金を出し合わないと解決できない問題だ。

成田　相模原殺傷事件は、多様性を認めない今の社会だから起きたと思う。「障害者なんていなくなればいい」という植松聖被告＝殺人罪などで起訴＝に近い考え方は、社会に広く根付いている。彼を「モンスター」として片付けてしまうと、同じような事件はまた起こる。社会に根を張る差別に対し、どう闘っていけるかを考えていきたい。

障害者を取り巻く本県の現状などについて語ったパネルディスカッション「私たちが生きる意味」＝宮崎市民プラザ（戎井聖貴撮影）

登壇者

自立生活を送る障害者
岩切　文代さん
（YAH!DOみやざき理事長）

精神障害のある
日高　信明さん
（宮崎こころリンク代表）

障害者の母親
井島　尚子さん
（県重症心身障害児者を守る会会員）

認知症高齢者を支援する
吉村　照代さん
（NPO法人ゆめ家族代表）

障害のない人の立場
大口　玲子さん（歌人）

助言者　成田　洋樹さん
（神奈川新聞記者）
大熊由紀子さん
（東京都・国際医療福祉大大学院教授）

進行　中川　美香
（宮崎日日新聞・生活文化部長）

基調講演

国際医療福祉大大学院教授　大熊由紀子さん

おおくま・ゆきこ　東京大卒業後、朝日新聞社に入社。1984（昭和59）年から17年間、論説委員を務めた。2004年から現職。

偏見は変えられる

元職員の植松聖被告＝殺人罪などで起訴＝は、なぜ相模原市の知的障害者施設・津久井やまゆり園で入所者ら46人を殺傷したのか。衆院議長宛ての手紙で、「職員の生気の欠けた瞳」「保護者の疲れきった表情」と書いている。これは事実ではと感じている。

事件後、神奈川県は「園のほぼ全体に大量の血痕が付着し、改修困難」「家族会の意向を反映した」などとして、同じ場所での全面的な建て替えを決定した。審議会として「大規模施設は時代に逆行している」と、他県の事例を紹介するなどして異議を唱え続けた。結果、神奈川県知事は当初の方針を撤回した。

街の中には通常、高齢者、若い人、病気の人、いろんな人がいる。

人間が生きるためには、居場所だと思える所や味方がいること、自分自身に誇りが持てることが大切。変えるためには「もし自分がそこにいたら」という想像力と、そこから脱出するための手だてを行う度胸が必要になる。「偏見や差別は変えられ

や障害者施設を造り、いろんな人を街の中からより分けている。

事件の起こった津久井やまゆり園も、山深いところにある。障害者施設が人里離れた所にあれば、重い障害のある人がこの世にいることすら分からない。障害のある人と共に歩む社会になれば、街から偏見もなくなる。

二世・易八大　きょうの運勢（16日）

献立

エゴマと豚肉の落とし焼き

2人分でエゴマの葉10枚、豚薄

茶の間

うめざわ　やすこ